# 1 Definition of regular function

定義 1.1 (regular function on quasi-affine variety Y).

 $f:Y\to k$  が regular functiona at a point  $P\in Y$  とは、以下の論理式が成り立つ事.

$$\exists U \in \mathcal{O}_Y, (P \in U) \land (\exists g, h \in A, (h|_U \neq 0) \land (f|_U = g/h))$$

定義 1.2 (regular function on quasi-projective variety Y).

 $f:Y\to k$  が regular functiona at a point  $P\in Y$  とは、以下の論理式が成り立つ事.

 $\exists U \in \mathcal{O}_Y, \ (P \in U) \land (\exists g, h \in S^h, \ (\deg g = \deg h) \land (h|_U \neq 0) \land (f|_U = g/h))$ 

多様体の間の写像として regular map が後に定義される.

## 2 About Remark 3.1.1

補題 **2.1.**  $Y(\subset \mathbb{P}^n)$  :: quasi-projective variety,  $f: Y \to \mathbb{P}^1_k$  :: regular function on quasi-projective variety  $Y \Longrightarrow f$  :: continus

(証明). そのために Lemma 3.1 と同じ方針で証明をする. 閉集合が閉集合へ写ることを示す.  $\mathbb{P}^1_k$  の閉集合は有限集合だから,一点集合が閉集合に写ることだけ見れば良い. ある開集合 U で f が

$$f|_{U} = q/h \ (q, h \in S^{h}, \deg q = \deg h, q|_{U} \neq 0)$$

とあらわせたとしよう.  $a \in f(U) \subseteq \mathbb{P}^1_k$  を任意にとると,

$$f^{-1}(a) \cap U = \{ P \in U \mid g(P)/h(P) = a \} = \mathcal{Z}_p(g - ah)$$

となる. g-ah は g,h が斉次かつ  $\deg g=\deg h$  かつ a が定数だから斉次である.  $^{(1)}$  よって  $f^{(-1)}(a)\cap U$  は closed set.

補題 **2.2.** X :: variety, U:: open in X, f, g :  $X \to k$  :: regular on U とする. このとき f = g on U ならば f = g on X.

(証明). 今,U において f,g が  $f=f_0/f_1,g=g_0/g_1$  とあらわせたとしよう。(U より大きい集合で  $f=f_0/f_1$  となっていれば単に制限する。)すると  $h=f-g=\frac{f_0g_1-g_0f_1}{f_1g_1}$  もまた U 上の regular function.したがって h は連続である。 $k=\mathbb{A}^1_k$  は T1 空間だから  $\{0\}$  は閉集合で,h は連続.よって  $A:=h^{-1}(\{0\})=\{P\in X\mid f(P)=g(P)\}$  は閉集合.明らかに  $U\subseteq A\subseteq X$  となっている.U は X:: irreducible set の開部分集合なので,Exsercise 1.6 より,U は dense.したがって  $\operatorname{cl}_X(U)=X$ .A は閉集合であるから, $X\subseteq A\subseteq X$  すなわち A=X が得られる.

 $<sup>\</sup>overline{\phantom{a}}$   $^{(1)}$ この一文だけが  $^{(1)}$   $^{(2)}$  affine の場合と異なる.他の部分は  $^{(3)}$   $^{(3)}$   $^{(4)}$   $^{(5)}$ 

# 3 p.16 Definition

#### 3.1 ring of regular functions on $Y : \mathcal{O}(Y)$

 $\mathcal{O}(Y)$  は Y 全体で regular な関数全体である。つまり、任意の点  $P \in Y$  について、ある P の開近傍 U が存在し、 $f = g_U/h_U$  on  $U, h_U \neq 0$  であるような  $g_U, h_U \in S$  を見つけられるもの。 $g_U, h_U$  は点 P と開近傍 U に依存することに注意。Y 全体で正則な有理関数を全て含むが、それよりも大きな集合になりうる。

 $\mathcal{O}(Y)$  が ring であることをみる. まず 0,1 は明らかにこの集合に属す.  $f,g\in \mathcal{O}(Y)$  をとると、適当な点 P とその開近傍 U について  $f=\frac{f_0}{f_1},g=\frac{g_0}{g_1}$  という表示がある. 以下の計算から、fg,f+g も U で regular.

$$fg = \frac{f_0 g_0}{f_1 g_1}, f + g = \frac{f_0 g_1 + g_0 f_1}{f_1 g_1}$$
 on  $U$ 

点  $P \in Y$  は任意に取ったので、fg, f + g は Y で regular.

#### 3.2 local ring of $P: \mathcal{O}_P$

**Definition**  $\mathcal{O}_P$  は P で regular な関数全体で作られる ring. 中身は P の開近傍  $U \subset Y$  と, quasi-variety U の各点で regular な関数 f の組で,

$$\langle U, f \rangle \equiv \langle V, g \rangle \iff f = g \text{ on } U \cap V \iff (f - g)|_{U \cap V} = 0$$

という関係で割っている. f から U が定まるのではなく、その逆である.  $Q \in U$  に対する f の有理関数表示が変わるかも知れない.

**check to be equivalence relation.**  $\equiv$  が同値関係であることは次のように分かる. まず反射律と対称律は明らか. 推移律は Remark 3.1.1 の

$$\langle U, f \rangle \equiv \langle V, g \rangle \implies f = g \text{ on } Y$$

より直ちに分かる.  $U \cap V \neq \emptyset$  は  $P \in U, V$  より直ちに分かる. この同値関係で割らなければ、 $\langle U, f \rangle$  と  $\langle V, f \rangle$  は異なるものになる.

**check to be ring** この集合が ring であることを示す.

$$a=\langle U,f\rangle, b=\langle V,g\rangle$$

とすると、ab, a+b の計算は次のようになる。まず  $Q \in U \cap V$  を適当にとると、開近傍  $(Q \in)W, (Q \in)Z$  において f,g はそれぞれ  $f=f_0/f_1, g=g_0/g_1$  と書ける。W,Z は irreducible set Y の開部分集合だから  $W \cap Z \neq \emptyset$ .

$$fg = \frac{f_0 g_0}{f_1 g_1}, f + g = \frac{f_0 g_1 + g_0 f_1}{f_1 g_1}$$
 on  $W \cap Z$ 

点  $Q \in U \cap V$  毎に開近傍  $W \cap Z$  がとれ,そこで fg, f+g が regular なので ring になっている.

**check for well-definedness** 演算が well-defined であることを示す.二つ の同値類 A, B をとる.それぞれの代表元を任意に 2 つずつとり,

$$a = \langle U, f \rangle, a' = \langle U', f' \rangle \in A; \ b = \langle V, g \rangle, b' = \langle V', g' \rangle \in B$$

としよう. 例えば ab, a'b' を計算すると,

$$ab = \langle U \cap V, fg \rangle, a'b' = \langle (U' \cap V'), f'g' \rangle$$

だが、f=f' on  $U\cap U'$ , g=g' on ' より fg=f'g' on  $U\cap U'\cap V\cap V=(U\cap V)\cap (U'\cap V')$ . よって ab=a'b'.  $a+b\equiv a'+b'$  なども同様である.

check to be a local ring  $\mathcal{O}_P$  は  $\mathfrak{m} = \{\langle U, f \rangle \mid f(P) = 0\}$  を唯一の極大イデアルとする局所環. 実際,  $\mathcal{O}_P$  の非単元はすべて  $\mathfrak{m}$  に属す. これは  $f(P) \neq 0$  ならば適当な P の近傍の中で 1/f が定義出来ること(対偶)から示される..

check to be a integral domain また, $\mathcal{O}_P$  は整域である.実際,fg=0 on  $U\cap V$  であるような  $\langle U,f\rangle, \langle V,g\rangle\in\mathcal{O}_P$  をとる. $P\in U,V$  より  $U\cap V\neq\emptyset$ . すると, $f=f_0/f_1,g=g_0/g_1$  on  $U\cap V$  となるような  $f_0,f_1,g_0,g_1\in S$  が存在する. $f_1,g_1$  は  $U\cap V$  で 0 とならないから,結局  $f_0g_0$  on  $U\cap V$  となっている.

 $\forall P \in U \cap V, \ (f_0 g_0)(P) = 0 \in k \iff \forall P \in U \cap V, \ f_0(P) = 0 \lor g_0(P) = 0$ 

よって f=0 on  $U\cap V$  または g=0 on  $U\cap V$  が成立. Remark3.1.1 より,これは, f=0 on U または g=0 on V, と書き換えられる.

#### **3.3** function field : K(Y)

K(Y) は Y 内のいずれかの点で regular な関数全体である。中身は  $\mathcal{O}_P$  のものと同様である。これは任意の  $\langle U,f\rangle(f|_U\neq 0)$  に対して逆元を持つ。すなわち体である。実際, $U'=U\setminus (U\cap\mathcal{Z}(f))^{2}$  と置けば, $(f|_U\neq 0$  より)これは空でないので, $\langle U',1/f\rangle$  と逆元を作れる。

## **3.4** $\mathcal{O}(Y) \subset \mathcal{O}_P \subset K(Y)$

この包含関係は殆ど自明である. 正確には, injection map が作れることは 自明である.  $\mathcal{O}(Y)$  の元は Y 全体で regular だから,  $\mathcal{O}_P$  に属す.  $\mathcal{O}_P$  の元は  $P \in Y$  で regular だから,必ず K(Y) に属す.

 $<sup>^{2)}</sup>f$  が 0 にならない U の開部分集合である

#### 4 Theorem 3.2

#### **4.1** About $\alpha: A(Y) \to \mathcal{O}(Y)$

多項式  $f \in A$  は Y 全体で定義されるから,これは  $\langle Y, f|_Y \rangle \in \mathcal{O}(Y)$  のように  $\mathcal{O}(Y)$  へ埋め込める.  $f \mapsto f|_Y$  という写像によって 0 となるのは  $\mathcal{I}(Y)$  の元のみであるから, $A \to \mathcal{O}(Y)$  から  $\alpha: A(Y) \to \mathcal{O}(Y)$  が得られる.

#### 4.2 About proof of (b)

点  $P \in Y$  に対応する A(Y) の極大イデアルは次のように作られる.

$$P\mapsto \mathcal{I}(P)\mapsto \mathcal{I}(P)/\mathcal{I}(Y)$$

さらに  $\mathcal{I}(P)/\mathcal{I}(Y)$  の元  $\bar{f}=f+\mathcal{I}(Y)$  を  $\alpha$  によって Y 上の regular function とみなすことでこの極大イデアルを  $\mathfrak{m}_P:=\{f\in A(Y)|f(P)=0\}$  と書くことが出来る.

#### 4.3 About proof of (c)

 $S=A\backslash\mathfrak{m}_P$  としよう。すると  $s\in S$  について  $\alpha(s)=\langle Y,s|_Y\rangle$  は  $\mathcal{O}_P$  の単元である。実際  $s(P)\neq 0$  だから, $s|_U\neq 0$  であるような P の近傍 U が存在して, $\langle U,1/(s|_Y)\rangle\in\mathcal{O}_P$ 。このことから Ati-Mac の Prop3.1(商環の普遍性)が使える。すなわち, $\beta:A(Y)_{\mathfrak{m}_P}=S^{-1}A(Y)\to\mathcal{O}_P$  であって  $\alpha(f)=\beta(f/1)$  となるものが存在する。 $f\mapsto f/1$  と  $\alpha$  は単射だから  $\beta$  は単射。さらに Prop3.1 の証明から  $\beta(a/s)=\alpha(a)/\alpha(s)$ .

この対応  $\beta$  が全射であることは  $\mathcal{O}_P$  の定義から直ちに分かる. つまり,  $\mathcal{O}_P$  の元はこのようにして得られるものしか無い. よって  $A(Y)_{\mathfrak{m}_P} \cong \mathcal{O}_P$ .

以上の段落から、 $\dim \mathcal{O}_P = \dim A(Y)_{\mathfrak{m}_P} = \operatorname{height} \mathfrak{m}_P$  が得られる。さらに A(Y) の元に点 P を代入する準同型に準同型定理を用いれば、 $A(Y)/\mathfrak{m}_P \cong k$  が得られる。(1.7) と (1.8A) より

 $\dim A(Y)/\mathfrak{m}_P + \operatorname{height} \mathfrak{m}_P = \dim A(Y) \iff 0 + \dim \mathcal{O}_P = \dim Y.$ 

#### 4.4 About proof of (d)

 $\operatorname{Quot}(A(Y))\cong\operatorname{Quot}(\mathcal{O}_P)$  本文中の quotinet field は整域の全商環  $^3$ ) の事、今,環 R の全商環を  $\operatorname{Quot}(R)$  と書くことにしよう、すると (c) の結果より,以下が得られる.

$$\mathcal{O}_P \cong A(Y)_{\mathfrak{m}_P} \implies \operatorname{Quot}(\mathcal{O}_P) \cong \operatorname{Quot}(A(Y)_{\mathfrak{m}_P}) \cong \operatorname{Quot}(A(Y))$$

 $<sup>^{3)}</sup>$ すなわち整域 R に対する  $S=R\setminus (0)$  による局所化

 $Quot(A(Y)_{\mathfrak{m}_P}) \cong Quot(A(Y))$  は以下のように示される. まず,

$$S_0 = A(Y) \setminus \mathfrak{m}_P, S_1 = A(Y) \setminus \{0 + \mathcal{I}(Y)\}\$$

と置くと  $\mathrm{Quot}(A(Y))=S_1^{-1}A(Y), \mathrm{Quot}(A(Y)_{\mathfrak{m}_P})=\tau(S_1^{-1})(S_0^{-1}A(Y))$  である. ただし  $\tau$  は  $x\mapsto x/1$  という単射写像である. Ati-Mac Ch.3 Ex3 より, これは  $(S_1S_0)^{-1}A(Y)$  と同型.  $^{4)}$  さらに

$$S_1S_0 = \{ xy \mid x, y \in A(Y) \land \neg (x \in \mathfrak{m}_P \lor y \in (\bar{0})) \}$$

であるので、 $\mathfrak{m}_{P}$ ,  $(\bar{0})$  がイデアルであることから

$$S_1S_0 = A(Y) \setminus (\mathfrak{m}_P \times (\bar{0})) = A(Y) \setminus (\bar{0}) = S_1$$

よって  $\operatorname{Quot}(A(Y)_{\mathfrak{m}_P}) \cong S_1^{-1}A(Y) = \operatorname{Quot}(A(Y)).$ 

 $\mathrm{Quot}(A(Y))\cong K(Y) \quad \langle U,f\rangle \in \mathrm{Quot}(\mathcal{O}_P)\cong \mathrm{Quot}(A(Y))$  を任意にとる. すると  $\langle U,f\rangle$  は  $f|_U\neq 0$  を満たすから,K(Y) の元として逆元  $\langle \tilde{U},1/f\rangle$  を持つ. したがって

$$\langle U, f \rangle^{-1} \mapsto \langle \tilde{U}, 1/f \rangle$$

という対応が作れた. 逆写像も作れる. それは単純に以下のように定まる.

$$(0 \neq) \langle \tilde{U}, 1/f \rangle \mapsto \langle \tilde{U}, f \rangle$$

 $\tilde{U}\subset U$  より  $\langle U,f\rangle\equiv\langle \tilde{U},f\rangle$  なのでこれは全単射. この写像が同型写像であることを見よう. つまり演算を保つことを見る.

$$\frac{\langle U,f\rangle}{\langle V,g\rangle}\frac{\langle U',f'\rangle}{\langle V',g'\rangle} \mapsto \quad \langle U\cap \tilde{V},f/g\rangle \langle U'\cap \tilde{V'},f'/g'\rangle \quad = \langle U\cap U'\cap \tilde{V}\cap \tilde{V'},ff'/gg'\rangle$$

$$\frac{\langle U,f\rangle\langle U',f'\rangle}{\langle V,g\rangle\langle V',g'\rangle} = \frac{\langle U\cap U',ff'\rangle}{\langle V\cap V',gg'\rangle} \\ \mapsto \langle U\cap U'\cap \widetilde{V\cap V'},ff'/gg'\rangle$$

あとは $\tilde{V} \cap \tilde{V'} = V \cap V'$ を見れば良い.

$$\tilde{V} \cap \tilde{V'} = \{ P \in V \mid g(P) \neq 0 \} \cap \{ P \in V' \mid g'(P) \neq 0 \}$$

$$= \{ P \in V \cap V' \mid g(P) \neq 0 \land g'(P) \neq 0 \}$$

$$= \{ P \in V \cap V' \mid \neg (g(P) = 0 \lor g'(P) = 0) \}$$

$$= \{ P \in V \cap V' \mid g(P)g'(P) \neq 0 \}$$

$$= \widetilde{V \cap V'}$$

+ についても同様である. (有理関数の積と和では分子のみ異なるが、以上の議論では分子の零点は関係なかった.)

 $<sup>^{4)}</sup>$ Ati-Mac Ch.3 Ex3 の証明は, $(a/st)\mapsto ((a/s)/(t/1))$  が同型でもあることを示せば良い。 st を (s,t) に因子分解するところに任意性があるので,どのように分解しても良いことまで示す必要が有る.

#### 4.5 About proof of (a)

 $\mathcal{O}_P$  は点 P で定義される regular function 全体だから, $\mathcal{O}(Y)\subseteq\bigcap_{P\in Y}\mathcal{O}_P$  は自明.(b),(c) を用いると  $\mathcal{O}_P\cong A(Y)_{\mathfrak{m}_P}=A(Y)_{\mathfrak{m}}$  となる.単射  $\alpha:A(Y)\to\mathcal{O}(Y)$  の存在から  $A(Y)\subseteq\mathcal{O}(Y)$  とみなせる.よって

$$A(Y)\subseteq \mathcal{O}(Y)\subseteq \bigcap_{\mathfrak{m}\in \operatorname{Max}(A(Y))} A(Y)_{\mathfrak{m}}.$$

この最左辺と最右辺が一致することを示そう. すると直ちに3つが全て等しいことが分かる.

整域 B について、その極大イデアルを 2 つとり、 $\mathfrak{m},\mathfrak{m}'$  とする. すると  $B_{\mathfrak{m}}\cap B_{\mathfrak{m}'}$  の元は、分母が  $\mathfrak{m}$  にも  $\mathfrak{m}'$  にも属さない元であるような分数である. よって  $B_{\mathfrak{m}}\cap B_{\mathfrak{m}'}=B_{\mathfrak{m}\cup\mathfrak{m}'}$ . このように考えることで、以下が得られる.

$$\bigcap_{\mathfrak{m}\in \operatorname{Max}(B)} B_{\mathfrak{m}} = B_M \quad \left(M := \bigcup_{\mathfrak{m}\in \operatorname{Max}(B)} \mathfrak{m}\right)$$

 $B\setminus M$  に非単元があればそれを含む極大イデアルが存在し、したがってその非単元は M に属す.よって  $B\setminus M$  は単元のみの集合(単元群)である. $B_M$  の元は分母が単元であるような分数だから、 $a/s\mapsto a\cdot s^{-1}$  という対応で直ちに B と同型になる.以上より  $B\cong B_M$ .

# 5 Proposition 3.3

命題 **5.1.**  $U_i = \mathbb{P}^n \setminus \mathcal{Z}_p(x_i)$  と置く. この時 (2.2) の写像  $\phi_i : U_i \to \mathbb{A}^n$  は isomorphism of variety となっている.

(証明). isomorphism of variety の定義からまず  $\phi_i$  が連続であることが必要だが、すでに同相写像であることがわかっている。 あとは regular function f/g について  $(f/g) \circ \phi_i$  も regular であることを示せば良い.

regular function の定義より、 $f,g \in k[x_0,...,x_n]$  は斉次である.これらを (2.2) の  $\alpha_i,\beta_i$  で写し合うことで証明を行う. $\alpha,\beta$  の添字 i は以降省略する.

$$\left(\frac{f}{g} \circ \phi_i\right)(x_0, \dots, x_n)$$

$$= \frac{f}{g}\left(\frac{x_0}{x_i}, \dots, \frac{x_n}{x_i}\right)$$

$$= \frac{\alpha(f)}{\alpha(g)}(x_0, \dots, x_n)$$

 $\alpha(g)(P)=0$  ならば  $\beta\alpha(g)(P)=g(P)=0$  が得られる. よって  $g(P)\neq 0 \Longrightarrow \alpha(g)(P)\neq 0$  なので, $\frac{\alpha(f)}{\alpha(g)}$  は regular.

# 6 About $S_{(\mathfrak{p})}, S_{(f)}$

 $S_{(\mathfrak{p})}$  が local ring で,その極大イデアルが  $\mathfrak{m}:=(\mathfrak{p}\cdot T^{-1}S)\cap S_{(\mathfrak{p})}$  であることを見よう。 $S_{(\mathfrak{p})}$  が ring であることは明らか.まず  $\mathfrak{m}$  がイデアルとなっていることだが,これは実際に計算して分子分母の次数を見れば良い.あとは $S_{(\mathfrak{p})}\setminus \mathfrak{m}$  が単元のみからなることを見れば良いが,これは $E:=T^{-1}S\setminus \mathfrak{p}\cdot T^{-1}S$  が単元のみからなることを元に直ちに分かる.E の元は f/g  $(g\not\in \mathfrak{p})$  と表されるような  $S_{\mathfrak{p}}$  の単元全体であり, $S_{(\mathfrak{p})}\setminus \mathfrak{m}$  は E の内次数 0 のものである. $S_{(f)}$  が ring であることも容易.

#### 7 Theorem 3.4

## 7.1 About $\phi_i^*$

多項式  $f(y_1,\ldots,y_n)\in A(Y)$  を取る. これを代入写像  $\Phi$ 

$$\Phi: y_1 \mapsto x_0/x_i, \dots, y_n \mapsto x_n/x_i$$

 $(x_i/x_i$  は ommited) で写して通分すると, $\bar{f}(x_0,\ldots,x_n)/x_i^{\deg f}$  という  $S(Y)_{(x_i)}$  の元が出来る.例えば i=1 とすると

$$y_1^3 + y_1 y_2 + 1 \mapsto \frac{x_0^3}{x_1^3} + \frac{x_0}{x_1} \frac{x_2}{x_1} + 1 = \frac{x_0^3 + x_0^2 x_1 + x_1^3}{x_1^3}$$

逆に任意に  $S(Y)_{(x_i)}$  の元を取るとそれは  $F(x_0,\ldots,x_n)/x_i^{\deg F}$  という形をしているが,

$$x_0 \mapsto y_1, \dots, x_i \mapsto 1, \dots, x_n \mapsto y_n$$

とすれば、この写像  $\Phi$  で F に写ってくるようなものが作れる. よって  $\Phi$  は 全射である.

構成した $\Phi$ の逆写像を観察すると、これはY上で消える斉次多項式 $F(x_0,\ldots,x_n)$ を $F(x_0,\ldots,1,\ldots,x_n)$ に写す。このようにして出来る多項式はまさしく $\mathcal{I}_a(Y_i)$ の元である。よって  $\ker \Phi = \mathcal{I}_a(Y_i)$ .正確には  $\ker \Phi = \mathcal{I}_a(Y_i)/\mathcal{I}_a(Y)$  である。  $(Y_i \subset Y$  より $\mathcal{I}_a(Y_i) \supset \mathcal{I}_a(Y)$  が成り立つことに注意。) $(A/\mathcal{I}_a(Y))/(\mathcal{I}_a(Y_i)/\mathcal{I}_a(Y)) \cong A/\mathcal{I}_a(Y_i)$  だから, $\Phi: A(Y) \to S(Y)_{(x_i)}$  から同型写像 $\phi_i^*: A(Y_i) \to S(Y)_{(x_i)}$  が作れた。

#### 7.2 About (b)

affine の  $\mathcal{O}_P$  は  $\mathcal{O}_P^a$  と書くことにする. projective も同様.

 $\mathcal{O}_P^p \cong A(Y_i)_{\mathfrak{m}_P'}$  最初に  $\mathcal{O}_P^p \cong A(Y_i)_{\mathfrak{m}_P'}$  とある. Theorem 3.2 は  $\mathcal{O}_P^a \cong A(Y)_{\mathfrak{m}_P}$  しか言っていないので、これを導く、まず  $\mathbb{A}^n \cong \sqcup_i$  を用いると、

$$\phi_i^*(\mathfrak{m}_P') = \mathfrak{m}_P \cdot S(Y)_{(x_i)}$$
 pass

$$S(Y)_{(x_i)} \cong A(Y_i)_{\mathfrak{m}'_P}$$
 pass

### 7.3 About (c)

$$\forall i, K^p(Y) = K(Y_i)$$
 pass

$$K^p(Y) \cong S(Y)_{((0))}$$
 pass

### 7.4 About (a)

 $f\in A(Y_i), x_0^q f^q\in S(Y)$   $f\in A(Y_i)$  をとると、 $A(Y_i)\cong S(Y)_{(x_i)}$  より f は  $g_i/x_i^{N_i}$   $(g_i\in S(Y)_{N_i})$  と書ける.したがって各 i について  $g_i=f\cdot x_i^{N_i}\in S(Y)_{N_i}$ .

今, $N \geq \sum N_i$  とすると,N 次単項式  $M = \prod_{i=1}^n x_i^{e_i}$  について少なくともひとつの  $e_i$  は  $N_i$  より大きい.なので  $f \cdot M$  は  $f \cdot x_i^{N_i} (\in S(Y)_{N_i})$  の倍数である. $S(Y)_N$  はこのような単項式で張られる k-vector space だから  $S(Y)_N \cdot f \subset S(Y)_N$  が分かる.

$$g_i^q = f^q \cdot x_i^{qN_i} = (f \cdot x_i^{N_i})(f^{q-1} \cdot x_i^{(q-1)N_i}) \in S(Y)_{N_i}$$

だから、 $g_i^q \in S(Y)_{N_i}$ . あとは q=1 の時と同様にして  $S(Y)_N \cdot f^q \subset S(Y)_N$ .

"we can replace the  $a_i$  by …" 式の左辺を観る.  $a_j \in S(Y)$  である.  $a_j$  を斉次分解してみる.

$$f^m + a_1 f^{m-1} + \dots + a_m = f^m + (a_0^{(1)} + a_1^{(1)} + \dots) f^{m-1} + \dots + (a_0^{(m)} + a_1^{(m)} + \dots)$$

すると f は 0 次式だから、この多項式の 0 次斉次部分は以下のようになる。

$$f^m + a_0^{(1)} f^{m-1} + \dots + a_0^{(m)}$$

これは斉次多項式だから projective variety の点を入れた時に値が0かどうかということは意味を持つ.

# 8 Proposition 3.5

A morphism  $\mathcal{O}(Y) \to \mathcal{O}(X)$  which induced by  $\phi$  is a homomorphism of k-algebras.  $\phi: X \to Y$  から誘導される写像  $\phi^*: \mathcal{O}(Y) \to \mathcal{O}(X)$  は次のようなものである.

$$\phi^*: (f: Y \to k) \mapsto (f \circ \phi: X \to k).$$

これは  $(af + bg) \circ \phi = a(f \circ \phi) + b(g \circ \phi)$  より、k-加群としての写像でもある。よってこれは k-代数の写像。また、 $f \circ \phi \circ \phi^{-1} = f$  より、以下が  $\phi^{*-1}$ .

$$\phi^{*-1}: (g: X \to k) \mapsto (g \circ \phi^{-1}: Y \to k).$$

**Naturallity of**  $\alpha$  多分. 単に「標準的な」という意味で natural と言っている.

#### 9 Lemma 3.6

 $x_i\circ\psi$  とあるが、これは  $x_i$  を  $(x_0,\ldots,x_n)\mapsto x_i$  という関数だと考えれば単に  $\operatorname{pr}_i\circ\psi$  のことである.この解釈は  $f(x_0,\ldots,x_n)\circ\psi=f(x_0\circ\psi,\ldots,x_n\circ\psi)$  を考えれば自然である.

If  $x_i \circ \psi$  is regular, then for all  $f \in k[x_0, \dots, x_n]$ ,  $f \circ \psi$  is also regular on X.

$$f \circ \psi = f(x_0, \dots, x_n) \circ \phi = f(x_0 \circ \phi, \dots, x_n \circ \phi)$$

 $\mathcal{O}(X)$  は任意の variety について環を成すから, $\mathcal{O}(X)$  の元の積と和で表示される  $f(x_0 \circ \phi, \ldots, x_n \circ \phi)$  は  $\mathcal{O}(X)$  の元.よって  $f \circ \psi$  は X で regular.

 $\psi$  is continuous. Y の閉集合  $\mathcal{Z}_a(E)$   $(E \subset k[x_0,\ldots,x_n])$  をとると,

$$\psi^{-1}(\mathcal{Z}_a(E)) = \{ \psi^{-1}(P) \in X \mid \forall f \in E, \ P \in f^{-1}(0) \} = \bigcap_{f \in E} \psi^{-1} \circ f^{-1}(0)$$

任意の多項式 f について  $f\circ\psi:X\to k$  が regular. regular なら continuous なので  $(f\circ\psi)^{-1}=\psi^{-1}\circ f^{-1}$  は閉集合を閉集合に写す. よってこの最右辺 は閉集合.

## 10 Corollary 3.8

k 上の affine variety と morphism of varieties が成す圏を **Aff** と書くこと にし、k 上の有限生成整域とその間の準同型写像が成す圏を k – **FinDom** と 書くことにしよう。 関手 A(-): **Aff**  $\rightarrow$  k – **FinDom** は対象 X を A(X) に 写し、射  $\phi$  を  $\alpha(\phi)$  にうつす.これが圏同値をつくることを示そう.

A(-) が圏同値をつくることと A(-) が忠実充満関手かつ本質的全射であることは同値である.忠実充満関手であることは Prop 3.5 で示されている.この系では一般の variety としている X を affine としているので  $\mathcal{O}(X)\cong A(X)$  が使えることに注意せよ.

本質的全射であることは,Ex1.5 から得られる.Ex1.5 ではべき零元を持たない k 上の有限生成代数は必ず何らかの代数的集合の affine coordinate ring

と同型であることを示す.しかしその証明から,任意の k 上の有限生成整域 B は素イデアル  $\mathfrak p$  を用いて  $k[x_0,\dots,x_n]/\mathfrak p$  と表せることがわかるから,任意 の k 上の有限生成整域 B はある affine variety X を用いて A(X) と表せる.